野球とは〝思い〟である。
グランドに入ったら、
体の中のスイッチを入れてほしい。
真の戦いはこれからである。

ISAO YOSHIDA

監督略歴

昭和36年	10月14日生まれ
昭和43年	諏訪市城南小学校入学
昭和48年	クラスの有志を集め少年野球チーム「城南フェニックス」を発足
昭和49年4月	諏訪市上諏訪中学校入学
	城南フェニックスメンバーを中心に
	野球チーム「諏訪レイクスターズ」を結成
昭和51年8月	長野県代表として中部日本大会に出場
昭和52年4月	長野県私立松商学園高等学校へ入学、野球部へ
昭和53年	第60回全国高等学校野球選手権大会へ出場
昭和54年	第61回全国高等学校野球選手権大会へ松商野球部主将として
	2年連続出場を果たす
昭和55年4月	東京鍼灸柔道専門学校 本科入学 スポーツトレーナーの道を目指す
昭和58年3月	同校卒業

職務経歴

昭和56年4月	東京都青木医院整形外科
昭和59年1月	退職
昭和59年2月	株式会社メジャートレーナーズ　入社
昭和59年8月	退職
昭和59年9月	長野県諏訪市に吉田治療室開業
平成4年10月	株式会社ファイナルトレーナーズ設立　代表取締役就任

野球略歴

昭和59年2月～平成2年	社会人野球熊谷組春季キャンプまで
	ロスオリンピック東京合宿トレーナー
昭和59年10月	信州工業高等学校硬式野球部(現都市大塩尻高校)
平成2年～平成14年11月	いすゞ自動車(株)野球部
平成3年～平成15年	NTT信越硬式野球部
平成3年～	プリンスアイスワールド
平成5年～平成7年	ヴェルディ川崎
平成5年	神奈川県社会人選抜台湾遠征
平成7年12月	長野県選抜高校野球選抜チーム台湾遠征代表トレーナーとして
	同行(選抜チームは大輪弘之監督)
平成14年	神奈川県社会人選抜ハワイ遠征
平成16年～平成18年	立命館宇治高等学校硬式野球部
平成15年～	群馬県私立前橋育英高等学校硬式野球部

ISAO YOSHIDA

吉田 功が命を掛けた

諏訪ドリーム

第1期生 Suwa Dream

吉田功監督へ

林 則之

謹んで 故 吉田 功 諏訪ドリームボーイズ監督の御冥福を御祈り致します。

私達諏訪ドリーム一期生は諏訪市立城南小学校の『城南フェニックス』で野球を始めた頃から吉田監督にお世話になった選手も多く、吉田監督との思い出も一入です。

『城南フェニックス』は、吉田監督が城南小学校時代に仲間と一緒に創設した少年野球チームであり、私達一期生は小学校、中学校共に吉田監督が創られた環境で野球をさせて頂き育ってきました。

そんな私達一期生は野球が上手い訳でもなく体格がいい訳でもないけれど、野球が大好きでした。打つ事が好きな奴もいれば守備が好きな奴もいて、練習後のばか話が好きな奴ばかりでした。そんなキャラクターを見越してか、今振り返れば吉田監督は選手一人一人の個性を尊重してチームを創って下さっていたのかと思います。

グラウンドでの吉田監督は私達にいつも問い掛けていました。自分達の意志で続けている野球。どうしたら勝てるのか、どうしたら上手くなるのか、そしてどうしたら野球をもっと楽しめるのか。これは私達が社会に出て自分自身の判断を迫られる時、自らの意志で行動し意見を述べる事のできる人間になって欲しいという監督の期待からであったのでしょうか。

吉田監督はいつも口を酸っぱくして話されました。自分たちが好きでやっている野球は協力してくださる方々によって支えられている。その人達に感謝して礼儀正しくする事。野球の関係者には勿論、毎朝文句も言わずに働きに出掛ける親父や泥だらけのユニフォームを洗濯してくれるお袋まで。

吉田監督は私たちと一人の野球人として、一人の学生として、一人の人間としてお付き合いして下さいました。吉田監督に見守られて育った私たち諏訪ドリームのOBや、今でもグラウンドで一生懸命白球を追いかける現役選手達をどうか天国から見届けていて下さい。

本当にありがとうございました。

合掌

2001 Suwa Dream 第1期生

武井友史 / 今井直弥 / 小池孝史 / 小澤 駿 / 関 達也 / 中村真徳 / 林 則之 / 原 数馬
堀内克起 / 吉田瑞貴 / 小島健作 / 北沢祥二郎

第９回全日本少年硬式野球選手権に出場 全国大会準優勝の快挙を果たす。

第3期生 Suwa Dream

恩師 吉田 功 監督へ

阿部 孝史

「孝史!!サードは、野球が下手でも元気があるやつがやるんだ!!」

私の野球に対する姿勢は恩師である吉田監督の一言が全てである。私達3期諏訪ドリームは、最初2人しかいなかった。しかしながら吉田監督に鍛えられた先輩たちのプレーを友達に観戦させると、口を揃えて“この監督のもとで野球がしたい!!”と言って短期間で大勢の選手が集まった。まだまだ野球に対する熱意も中途半端な中学生が、一同にこのような感情を抱いたのも吉田監督の魅力、野球に対する熱意を強く感じることができたからであると私は思う。

吉田監督との思い出を語りはじると永遠に続いてしまうので、私達の学年の選手全員が印象深いであろうことを記す。私たちが中学三年のとき開催されたヴァーナル杯のこと。この大会は初参加の大会で、予選を勝ち抜くと甲子園球場で試合ができるという大会であった。大会が受験期であったのにもかかわらず、メンバー全員が“吉田監督とこのチームで甲子園に行きたい!!”
“吉田監督ともっと野球がしたい!!”
という思いで一人も欠くことなく集まり再び練習を開始した。結果、予選を勝ち抜くことができた。そして吉田監督をマウンド上で胴上げすることができた。この時の胴上げされている吉田監督の喜んでいる顔は今でも鮮明に覚えている。わずかに涙ぐんでいるようにもみえた。吉田監督に野球を教わりたい一心で集まった選手が、野球だけではなく吉田監督の人としての偉大さを感じ、温もりを感じたからこそ吉田監督を喜ばせたいその一心で団結して優勝することが出来たのだろうと思う。

最後に、私達が中学時代、そしてこれまでに吉田監督に教わった、人としてのあり方を野球を通して全力で子供たちに伝えていくことが私達のできる吉田監督への最大の恩返しであると思う。

吉田　功　監督　ありがとうございました。

2003
Suwa Dream
第3期生

阿部孝史 / 唐沢鷹多 / 小池暢明 / 竹井　優 / 夏目裕太 / 濱　竜弥 / 藤森隆広 / 前田芳宏
松坂良紀 / 両角聖人

第 11 回全日本春季大会に出場ベスト8に
第 11 回全日本少年硬式野球選手権大会に出場
チャンピオン大会　第3位により甲子園フェスティバルに出場。

第7期生 Suwa Dream

今、それぞれの夢に向かって

小池 雄悟

急患です!

ニコニコしながら高校球児の野球肘の治療を行う恭佑の横を救急車から降ろされた患者が通り過ぎる。どうやら患者は中学生のようだ。その生徒に付き添ってきたのは体育教師の矢島。そこへ白衣をまとった二人の医師が駆けつけた。真面目に患者の様態を救命士河西に確認する裕矢、手術室へ運べと偉そうな雄悟。

骨折し入院中の映画監督柳沢の寝言はオペ終了の合図となっている。「カーット!!」

ここはドリーム7期生病院。あそこで大きな体から細やかな治療を提供しているのは理学療法士の航である。

元気な産声が院内に響き渡った。生命誕生の瞬間、最愛の奥さんの横で見守っていたのは現役時代、怪我ばかりしていた凌市である。

おや、どうやら院内のATMが壊れて、一人の銀行員がかけつけたようだ。中学時代黒板を拳で叩き割っていた克磨だ。残念ながらATMの機械は拳では直らない。

この病院にある最新の医療機器。これらはすべて内藤によって開発されたもの。彼の中学時代の期末試験の解答にはユーモアがあふれていた。「Which do you like better summer or winter?」という質問に対して「Yes, because I'm very sad.」

こんな彼のユーモア溢れる発想が彼の会社を成功へと導いたのかもしれない。

おっと重要な人を忘れてはいけない。

お昼、売店からいい匂いがしてくるのはパン屋の主砲、清水が配達してくれるおかげだ。

院内を見渡すと、あらゆるところに張り紙がしてある。

「グランド内は歩かない、病院内は走らない」
「治りたいと思わないやつは病院から出ていけ」
「人間の言葉で喋れ、痛いときははっきり言え」
「目標は治すこと、目的は生きること」
「手術室に入ったら人格を変えろ」
「ナスは人間の食うものじゃない」

さあここは明日も忙しい。

朝はもちろん竹取物語の朗読から始まる。医療は首から上でやるものだ。

と、たまにこんな妄想をする。

もし監督に出会ってなかったらこんな夢を描くこともなかっただろう。

3年になった春、監督は俺たちを並べ自分の病気を自らの口から告げてくれた。体調が悪い日も俺たちのためにグランドで怒鳴ってくれた監督。俺たちの想像を絶する苦しみや不安があったに違いない。それにもかかわらず俺たちを最高の舞台に立てるほどのチームに仕上げてくれた。監督と淡路に行けてよかった。心からそう思う。

あの夏は一生忘れない。

監督、

「お前は家で母ちゃんのおっぱいでも飲んでろ。」と言われていたくらい小さかったり、監督の話がチンプンカンプンだったり・・・

そんなどうしようもなかった俺たちが今それぞれの夢に向かって一歩ずつ歩んでいます。

俺たち全員が監督のおかげでここまで来れた。

大好きな監督に感謝なんて伝えきれないし、どうしたら恩返しができるかもわからない。

まだまだ未熟でエラーもするし、内野ゴロひとつアウトにするのも一苦労である俺たちだけど、夢に向かって走るしかない。

「全てのことは心から始まる」

そう心に刻んでがんばろうと思う。

俺たちの十年後、二十年後を監督に捧げたい。

2007 Suwa Dream 第7期生

河西　諒 / 北澤裕矢 / 小池雄悟 / 五味克磨 / 五味恭佑 / 清水 優 / 田中 航 / 内藤涼太
山田凌市 / 矢島駿一 / 柳沢凌介

第 15 回全日本少年硬式野球選手権大会に出場。
財団法人　日本少年野球連盟（ボーイズリーグ）に加盟。

吉田野球=独立自尊

舟波 凌

小学校6年生の11月、初めてDreamの練習に参加したとき、いきなりサインプレーを行っている投内連係のマウンドに連れて行かれた。そこで、頭を使ってやる野球のおもしろさを、初めて体験させてもらった。野球というスポーツの魅力を肌で感じたそのときから、僕は吉田野球のとりこになってしまった。

野球というスポーツは古くからのスポーツで、軍隊の様であり、監督は選手がミスをするといきなり殴ったりするものだと僕は思っていた。しかし、吉田監督は違っていた。選手が失敗したら、なぜそういうプレーになったのか、どういうプレーをすればいいのかを、殴るのではなく言葉でしっかりと説明してくれた。また、野球のことだけではなく、僕らが社会にでても通用できるために礼儀やマナーを教わった。それはまさに慶應義塾の精神である「独立自尊」に相通じる部分がある。

今、こうして考えてみると、僕が慶應高校で野球をすることができ、人間として独りで立ち、自らを尊び、生活できているのも監督のおかげであると思う。

今度は僕が恩返しをする番である。

吉田監督を甲子園に、そして神宮のマウンドに必ず連れて行く。

7

2010年度
慶應義塾高等学校
推薦入試

受験番号

志願者をよく知る方による志願者紹介文

フリガナ フナミ リョウ
志願者氏名 舟波 凌

志願者をよく知る保護者以外の方にお尋ねいたします。志願者は学校内または学校外でどのような活躍をしていますか。志願者の人柄・特技を800字以内でお書きください。

志願者との関係 野球部監督 記載者署名 吉田 功

突然の雷雨で試合は中断された。全国大会への代表決定戦。3点リードの5回表、相手の攻撃は2死、3番打者をフルカウントと追い込んでいた。次の1球で試合は成立する。しかし両チームとも中断は試合の流れを大きく変える事もある。舟波は、投球練習を全て自慢の速球、捕手のサインに3回首を振り、長中から落ちるスライダーを見事三振に仕留めた。球威、コントロールもさる事ながら、その爽快な投球は、胸をスッキリさせていた。

いざる年、注目の投手舟波が初めて練習に来た時、上級生の投手と共に投内連係、サインプレーに入れてみた。初めて球を使った練習に、帰路の車の中で、「このチームでやりたい」と語ったと言う。普段から、「野球は、首から上の競技である」と言っている。私と舟波投手との出逢いを思い出した。

主将、4番、投手として、闘争心にあふれ勝負強く、爽快な投球ができる舟波君は、甲子園出場の原動力となる事、確信致します。

(20文字×30行)

(注意) 専用の欄は記入しないでください。

吉田監督から教わったものを胸に、これからも「すべての人に感謝」しながら、野球をしていきたい。